

社会経済学2 (2014年度前期)

第7回: カレツキアン・モデル

担当者: 佐々木 啓明*



*E-mail: sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp; URL: <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~sasaki/>

——はじめに——

カレツキアン・モデルとは, ポーランド出身のミハイル・カレツキ(1899–1970)のアイデアをモデル化したもの. カレツキアン・モデルを用いる経済学者のことをカレツキ派と呼ぶ. カレツキ派は, ポスト・ケインズ派の一派.

カレツキアン・モデルの特徴は, 以下の5つ.

1. 寡占市場における企業のマークアップ・プライシング (p の決定).
2. 完全稼働までは限界費用が一定.
3. 稼働率 u が 1 以下.
4. 貯蓄から独立した投資関数の存在 (有効需要の原理).
5. 実質賃金 $w = W/p$ と利潤率 r は必ずしも対抗関係にない.

■ 価格の決定

$$p = (1 + \theta) \frac{W}{a}. \quad (1)$$

θ : マークアップ率, W : 貨幣賃金, a : 労働生産性. これは「カレツキアン・モデルでは利潤シェア π が一定となる」ということを意味する.

■ 利潤率の分解

$$\begin{aligned} r &= \frac{\Pi}{pK} = \frac{\Pi}{pK} \times \frac{Y}{Y} \times \frac{Y^*}{Y^*} = \frac{\Pi}{pY} \times \frac{Y}{Y^*} \times \frac{Y^*}{K} \\ &= \pi \times u \times \kappa \\ &= \pi \times u \quad \text{if } \kappa = 1. \end{aligned} \quad (2)$$

Y^* : 潜在産出量, $u = Y/Y^*$: 稼働率, $\kappa = Y^*/K$: 潜在産出・資本比率.

■ 貯蓄関数と投資関数

$$g_s = s_c r = s_c \pi u, \quad (3)$$

$$g_i = \alpha + \beta u, \quad \alpha > 0, \beta > 0. \quad (4)$$

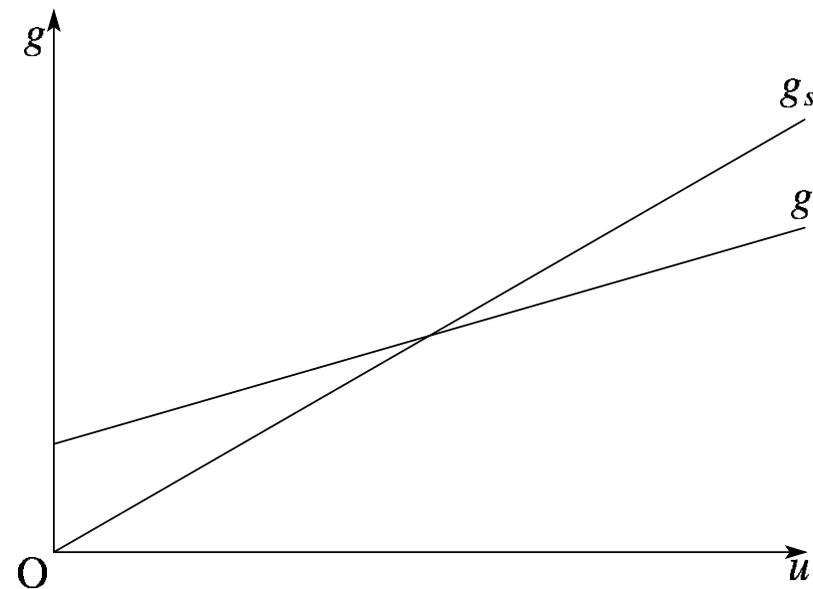


Figure 1: カレツキアン・モデルにおける均衡の決定

■ 倅約の逆説と費用の逆説

1. 資本家の貯蓄率 s_c が上昇すると何が起きるか？
2. 利潤シェア π が上昇すると何が起きるか？

——拡張その1: 賃金からの貯蓄——

利潤からだけでなく, 賃金からも貯蓄することを考える.

$$g_s = [s_w(1 - \pi) + s_c\pi]u \quad (5)$$

s_w : 賃金からの貯蓄率, s_c : 利潤からの貯蓄率.

投資関数はこれまでどおり.

$$g_i = \alpha + \beta u. \quad (6)$$

比較静学分析

1. s_c が上昇すると?
2. s_w が上昇すると?
3. π が上昇すると?
4. α あるいは β が上昇すると?

利潤のみから貯蓄される場合との違いは?

——拡張その2: 賃金主導型成長と利潤主導型成長——

これまでは, 利潤シェア π が増大すると, g^* が低下した. このことを「賃金主導型成長」と呼ぶ.

しかし, 1970年代以降の先進国では, 利潤シェアの低下を伴った低成長が観察された. つまり, π が増大すると g^* は上昇する. このことを「利潤主導型成長」と呼ぶ.

カレツキアン・モデルで利潤主導型成長を説明できるか?

投資関数を次のように変更する.

$$g_i = \alpha + \beta u + \gamma \pi. \quad (7)$$

$r = \pi u$ の u と π が別々に影響すると考える.

貯蓄関数はこれまでどおり $g_s = s_c r = s_c \pi u$. 財市場の均衡条件 $g_s = g_i$ より,

$$u^* = \frac{\alpha + \gamma \pi}{s_c \pi - \beta}, \quad (8)$$

$$g^* = \frac{s_c(\alpha + \gamma \pi)\pi}{s_c \pi - \beta}. \quad (9)$$

$s_c \pi - \beta > 0$ を仮定する (ケインジアン安定条件).

利潤シェアの増大が成長率に与える影響.

$$\frac{dg^*}{d\pi} = \frac{s_c(s_c \gamma \pi^2 - 2\beta \gamma \pi - \alpha \beta)}{(s_c \pi - \beta)^2} \quad (10)$$

分子の括弧部分を $f(\pi) = s_c \gamma \pi^2 - 2\beta \gamma \pi - \alpha \beta$ とおく.

$f(\pi) > 0$ であれば, $dg^*/d\pi > 0$ となって, 利潤主導型成長.

$f(\pi) < 0$ であれば, $dg^*/d\pi < 0$ となって, 賃金主導型成長.

利潤主導型成長は得られるか?

——拡張その3: プロフィット・シェアリング——

- プロフィット・シェアリングとは, 利潤の一定割合を労働者に再分配する政策.
- 企業がプロフィット・シェアリングを導入するのは, 労働者にインセンティブを与えることで労働生産性を上昇させ, それによって利潤を上昇させるため.
- 労働者がプロフィット・シェアリングに同意するのは, 基本給に加えて利潤の一定割合を受けとることができ, 所得が上昇するから.
- 日本におけるプロフィット・シェアリングの一例はボーナス制度.

利潤のうち労働者に再分配される割合を σ と仮定する.

$$g_s = s_c(1 - \sigma)\pi u, \quad (11)$$

$$g_i = \alpha + \beta u. \quad (12)$$

$$u^* = \frac{\alpha}{s_c(1 - \sigma)\pi - \beta}, \quad (13)$$

$$g^* = \frac{s_c(1 - \sigma)\pi\alpha}{s_c(1 - \sigma)\pi - \beta}. \quad (14)$$